

川崎三郎（紫山）と徳富蘇峰の往復書翰（二）

大谷 正

専修大学文学部教授

目次

はじめに

- 一 徳富蘇峰宛川崎三郎書翰（以上一〇五号所収）
- 二 川崎三郎宛徳富蘇峰書翰（以下本号所収）
- 三 解説・往復書翰から見た川崎三郎と徳富蘇峰の五〇年を超える交友関係

二 川崎三郎宛徳富蘇峰書翰

1 明治23年3月14日

1 貴翰拝読仕候、三浦中将未だ面識ニ無之候間何卒御手元ニて御都合被成下度候。芳野世経氏は如何ニ御座候哉、島

地黙雷氏は如何、福地源一郎氏ハ如何、御近傍の古沢滋氏ハ如何、今少し思ひ切りて福沢翁ハ如何。目下漁陽の大援ヲ要スルの時機、幸ニ大兄一臂の力ヲオシム勿れ。勿々頓首

三月十四 徳富生

紫山大兄

〔封筒表〕 麻布宮村町七十七 北村三郎様

〔封筒裏（切手あり）〕 京橋日吉町 民友社 徳富猪一郎

2 明治（23）年4月3日

肅啓 只今ヨリ帰東仕候、若し御差支ナクハ鳳駕ニ陪し臨水事件御觀察の爲め御出京如何、右招待状及び金二十円、西京上京寺町丸太町区下ル大沢善助氏迄托し置候間御落手可被下候。

四月三日夜

徳富猪

紫山老兄玉案下

〔封筒表（切手あり）〕 名古屋大提屋新聞記者宿所 北村三郎様

〔封筒裏〕 西京三條小橋 徳富猪一郎

3 明治（24）年5月19日

謹啓 時下愈御清健奉大賀候、陳レハ国民新聞停止ニ就てハ何か国民之友尊文御恵投被成下間敷哉、此段御相談申

上候。頓首

五月十九

猪一郎

紫山老兄貴下

〔封筒表〕 麻布宮村町七十七 北村三郎様

〔封筒裏（切手あり）〕 民友社 徳富猪一郎

4 明治44年10月4日

老父耳聾談話困難ニ付、御見合可被下候様願之。

四十四 十月四 猪

紫山老兄大人

〔蘇峯用箋〕

〔封筒表（切手あり）〕 市内赤坂仲ノ町黒龍会本部 川崎三郎殿 御侍史

〔封筒裏〕 東京市赤坂区青山本町六丁目三十番地 徳富猪一郎

5 大正3年5月7日

啓上 尚不愧斎集ハ一読候、然るニ原仲寧ノ晩節ニ関シ、其の一橋興山公ヲ幫けて掉尾ノ運動ヲナシタルコトニ付
キ、何之材料ハ無之候哉、御垂誦被成下候者大幸ニ奉存候。勿不一

猪

紫山大人 大正三 五月七 [蘇峯用箋]

〔封筒表（切手あり）〕 東京市外千駄ヶ谷五三七 川崎三郎様 伺

〔封筒裏〕 東京市赤坂区青山本町六丁目三十番地 徳富猪一郎

6 大正8年5月2日

江州ノ塚本源三郎氏ノ母堂今度高等女学校ヲ私設シ之ヲ公有ニ献納シ其開業式ヲ五月十日ニ挙行スルニ付、一言祝詞ヲ御書キ送り被下哉。塚本氏ハ当今富豪中珍しき篤志者ニ候テ、其ノ一家親族代々皆恤リ、其ノ母堂ノ如キモ既ニ八十歳ニ垂ントシテ一家ハ固リ公共ノ要ニ努力シツ、アリ、右ノ意見ニテ小生名儀の一文御艸ノ上御送被下度候。同氏ノ場所ハ並木氏ニ御聴キ被下度候。

江州蒲生郡五箇荘かと存候。並木氏承知セサレハ同人東京宿所ニ電話シ御聞合被下候。

大正八五月二 猪

紫山大人玉几下

何分六菖十菊トナラサル様奉合掌候。

〔封筒表（切手あり）〕 東京市外千駄ヶ谷五四九 川崎三郎殿 至急親報

〔封筒裏〕 相州湯河原 蘇峯生

7 大正10年2月22日

乍恐縮一詩御代作奉合掌候。勿不一

大正十 二月念二 猪

紫山先生

〔封筒表（切手あり）〕 東京市外大井町字出石五一・六 川崎三郎殿 親伺

〔封筒裏〕 相州逗子櫻山老龍庵 徳富（印刷した印？）

8 昭和6年5月29日

付高仰二候

行幸記念聖柱

第一明治天皇

第二昭和今上

勝

茶業日本第一

蘇峰撰文

〔封筒表（切手なし）〕 川崎紫山大人 猪 本文ニ就キ今一応御修正ヲ乞フ

6・5・29

〔封筒裏〕 相州逗子櫻山老龍庵 徳富（印刷）

5 川崎三郎（紫山）と徳富蘇峰の往復書翰（二）（大谷）

9 昭和6年8月28日

皇政一新の業成リシ以来、既に六十年。今や昭和の御宇に際し、維新回天の皇謨を翼賛したる一人、山県有朋公の伝記を編述するは、蓋し等閑の業ではない。公の生涯は、孝明天皇、明治天皇、大正天皇の三朝に亘り、然も其の三朝に於て、其の程度に於ても、其の性質に於ても、何れも同一ではなかつたか、皆それぞれの役目で働いた。特に明治天皇の御宇に於ては、何れの元老に比しても、決して遜色なき役目で働いた。天下西郷、大久保、木戸を以て、維新の三傑と称し。三條、岩倉を以て、維新の両卿と唱ふ。彼等は何れも明治中興の大舞台に於て、顕著なる勤勞を致した。然も上は彼等に連接し、下は大正の御宇に及び、文武両方面に於て明治大正兩朝の元勳たる等は、偏に是れ公を推さすハならぬ。公に対する世評は、必らずしも蓋棺の今日と雖も一定しない。然も公の此の独特の位置ハ、孰レハ如何なる苛酷なる批評書も之を否定することは能はない。

〔封筒表（切手あり）〕 伊豆熱海町西山温泉小西旅館 川崎三郎様 親展（鉛筆書き 蘇峯筆跡の一 山県伝）

〔封筒裏〕 東京市京橋区日吉町民友社 徳富猪一郎（印 東京市外大森山王 徳富）

※黒龍会出版部封筒に入る。切手なし。（表 徳富蘇峰筆跡 裏 大正十五年 月 日 東京市麹町区永田町二丁目八十六番地 『武道極意附剛勇百話』発行所 黒龍会出版部 振替口座東京一三七九九番 電話銀座七二二〇番）

10 昭和9年7月18日

拝復 如貴命山中冬支度二候、御申聞ノ一件先生御起稿被成下候ハ、仕合ニ奉存候。賤名ハ御入用ナラハ御使用ニ一任可仕候。勿不一

猪一郎

紫山先生玉几下

一度御来遊如何、エーワンも出張イタシ申候也。福並八重樫両氏にもヨロシク御申聞被下候。悪詩五首新聞ニ送り候、御一覽ノ上御叱正奉合爪候也。

〔封筒表（切手あり）〕 東京大森区南千束町三四〇 川崎紫山先生 拝復 蘇叟

〔封筒裏〕 東京銀座西八丁目 民友社 徳富猪一郎 山中湖畔 双宜荘

11 昭和10年1月19日

謹啓 過日御起艸ノ潤筆料輕少ナレトモ向方ヨリ相送候間差出申上候。勿不一

紫山大人 蘇叟拜具 10・1・19

〔封筒表（切手なし）〕 川崎紫山先生 10・1・19 蘇叟拜具

〔封筒裏〕 東京市大森山王 徳富

12 昭和10年7月16日

御手教敬承、万事ヨロシク御処措被下度候。其中御光来延頸御待申上候。勿拜具

昭和十 七月十六 蘇叟拜具

紫山先生玉几下

〔封筒表（切手あり）〕 東京市銀座西八丁目九 民友社 川崎紫山先生 拝答

〔封筒裏〕 東京銀座西八丁目 民友社 山梨県富士山麓山中湖畔旭日丘双宜荘 徳富猪一郎

13 昭和10年7月17日

御来示敬承、石井君ニもヨロシク、万事貴意ノ通り悦申上候也。勿不一

昭和十 七月十七

〔葉書〕 東京市銀座西八丁目九 民友社 川崎紫山大人

山梨県富士山麓山中湖畔旭日丘 双宜荘 徳富猪一郎

14 不明

●伏見鳥羽戦争

●上野彰義隊戦争

●会津戦争

●函館戦争

戦争は其の政局ニ大関係あるもののみを掲ぐ、即ち上の如し

●戦争の記事ニハ戦図を添申可し

●戦争に関する逸事奇談は付録として添申可し

●戦争ニハ其の前後の大勢を記す可し

●戦争の文字は左伝史記ノ如ク色彩アルヲ要す

●文字は一切言文一致とす 但引用文ハ此限ニあらず

〔封筒表（切手なし）〕 川崎大人

〔封筒裏〕 東京市赤坂区青山東町六丁目三十番地 徳富猪一郎

15 不明

拝啓 過日ハ御尊著被成下奉深謝候。倍御清勝御執筆の由、欣然此事に奉存候。 迂生も奉無事勉強罷在候間、乍憚御放神被成下候。猶勝海舟先生碑文及長野氏碑文、 迂生執筆仕候もの御帰京早々御斧正願上度、今より御願申上置候。 何卒御容謝無之御加筆御叱正のほど呉々も御願申上候。 勿々頓首

紫山先生玉几下 先ハ要用のみ 老人 〔蘇峰用箋〕

〔封筒表（切手なし）〕 川崎先生

〔封筒裏〕 東京市銀座西八丁目九 民友社 徳富猪一郎

三 解説・往復書翰から見た川崎三郎と徳富蘇峰の五〇年を超える交友関係

（一）徳富蘇峰記念館所蔵の徳富宛川崎書翰と川崎宛徳富書翰について

「まえがき」でもすでに述べたが、本稿は徳富蘇峰記念館所蔵の徳富蘇峰宛川崎三郎書翰と川崎三郎宛徳富蘇峰書翰を翻刻するもので、さらにこれらの翻刻の理解に資するため、この解説では五〇年以上にわたる往復書翰を通して見える両者の関係について簡単に述べる。

なお、今後この解説で徳富蘇峰宛川崎三郎書翰を引用するときは、翻刻の手紙に付した番号に従って、川崎1などと表記する。川崎1は、明治二三（一八九〇）年三月六日付の徳富蘇峰宛川崎三郎書翰を意味する。川崎三郎宛

徳富蘇峰書翰を引用する場合は、同様に徳富1とし、これは明治二三年三月一日付の川崎三郎宛徳富蘇峰書翰のことである。

徳富蘇峰記念館は、徳富蘇峰に私淑し、蘇峰晩年の一九四〇年頃から一九五七年まで秘書を務めた塩崎彦市（神奈川県生まれ、一八九九年～一九七八年）が一九六九年神奈川県二宮町の自宅敷地に開設した施設で、蘇峰から遺贈を受けた蘇峰宛書翰、蔵書、原稿、揮毫を所蔵展示したものである。塩崎彦市の死後、その遺志を継いだ遺族が徳富蘇峰記念塩崎財団を設立し、一九七九年から博物館として公開されている。現在の時点で確認された徳富蘇峰宛書翰は四七〇〇通余であるという。^① 徳富蘇峰記念館所蔵の徳富宛書翰の翻刻・紹介は様々な形で行われている^②が、徳富宛川崎書翰は未だに本格的には翻刻されていないので、本稿で翻刻を試みた次第である。徳富蘇峰記念館ホームページの人物検索の川崎三郎の項には、次のようなデータが記されている。

蘇峰宛書簡 明治（二一通） 大正（九通） 昭和（四八通） 不明（六通） 計八四通

封書（七五通） 葉書（九通） 直筆（八二通） 印刷（二通）

蘇峰書簡（蘇峰発信） 明治（四通） 大正（四通） 昭和（五通） 不明（二通） 計一五通

本稿で翻刻するに当たって、蘇峰宛川崎書翰については、八四通の内、印刷物二通、不鮮明で判読できない一通、蘇峰秘書の八重樫美子宛一通、筆者が川崎と確定できない二通、そして川崎宛古田吉三郎書翰一通の合計七通を除いた七七通を川崎書翰とし、翻刻した。ただし、川崎宛古田吉三郎書翰は、川崎15の理解を助けるため、川崎15-2として翻刻している。

七七通の内訳は、明治二〇通、大正九通、昭和四六通、不明二通である。なお、このなかには同志社大学図書館（徳富文庫）所蔵の徳富宛川崎書翰を筆写したものが二通含まれており（川崎32と川崎38）、これらは蘇峰秘書であった中島司が筆写した可能性が高い。

一方、川崎宛蘇峰書翰一五通は全て翻刻した。ここで生じる疑問は、なぜ徳富蘇峰記念館に川崎に宛てた蘇峰の手紙があるのか、これらの書翰はいつどのような経緯で蘇峰のもとに戻って来たのかという問題である。これに関連すると推測される、次ぎのような塩崎彦市宛川崎三郎書翰（昭和（不明）年一月一〇日）が徳富蘇峰記念館に所蔵されている。

蘇峰先生

一 書翰

十六通

一 筆蹟並原稿

五葉

一 徳富令夫人手翰

一通添

友人ニ預ケ置候モノ、又ハ故紙堆裏取調ノ上更ニ搜索差上クベシ。外ニ諸名家ノ書東モアリ、必要トアレハ差上クベシ。

十二月十日

川崎

塩崎賢台玉案下

〔封筒表（切手なし）〕 塩崎賢台親展 川崎拝

この川崎書翰から、塩崎から川崎に対する、徳富蘇峰の書翰を返却してほしいという要請に応じて、川崎が蘇峰の手紙一六通、その他に蘇峰の筆蹟五葉・静子夫人の手紙一通を返却したこと、そして返却された手紙・草稿の多くが現在まで徳富蘇峰記念館に保存されていることが分かる。また川崎は、これ以外にも友人に預けたものや、資料に紛れてしまった蘇峰の書翰があるとも述べている。塩崎が蘇峰の手紙の回収を試みた理由、時期および返還を依頼した対象者の範囲は不明であるが、塩崎が秘書となった一九四〇年頃、当時徳富家の顧問弁護士を務めていた早川喜代次が「徳富蘇峰伝記編纂会」を組織し、伝記編纂に着手したことから、蘇峰書翰の回収は関係しているかもしれない。⁽³⁾

翻刻した徳富蘇峰宛川崎三郎書翰の年月日、差出人自称、宛名、内容要旨を一覧にしたものが表1、同じく川崎宛徳富書翰を一覧にしたのが表2である。また表3は川崎の略年譜案である。以上の三つの表を参照しながら、最初に書翰の自称と宛名（敬称・脇付）を手がかりとして五〇年に亘る川崎と徳富の関係性の変化について概観し、つづいて明治と大正・昭和の各時期に分けて、往復書翰の概略について解説を試みたい。

（二）書翰の自称と宛名の敬称・脇付から見た川崎と徳富の関係

表2の川崎宛徳富書翰は一五通と少ないものの、一八九〇年（明治二三）から一九三五年（昭和一〇年）までの書翰が存在し、時代の偏りは少ない。

それに対して、表1の徳富宛川崎書翰は七七通と数は多いものの、川崎14（明治三八（一九〇五）年）から川崎21（大正一〇（一九二一）年）までの間の約一五年分が抜けている。明治期で年代不明の川崎15から川崎20までの手紙は、その内容から一八九〇年から一九〇〇年頃までの手紙と推定されるので、一九〇五年から一九二一年まで

13 川崎三郎（紫山）と徳富蘇峰の往復書翰（二）（大谷）

表1 徳富蘇峰宛川崎三郎書翰

	年月日	差出人自称	宛名	書翰の要旨
1	明治23年3月6日	小弟北邨生	蘇峯先輩几下	世界百傑伝第一編上梓、巻頭に老台の題辭を乞う
2	明治(23)年3月11日	北邨生	徳富先生	稿料落収、奇人俠客、老僧仙士、武人の紹介願う
3	明治(23)年3月14日	北邨生	蘇峯老台	学者政治家社会の後は保守黨員、奇士俠客最も妙
4	明治(23)年3月16日	紫山頑民	蘇峯老兄	第1回陸海軍大演習取材、百傑伝序文本日中に入稿依頼
5	明治(23)年3月21日	北邨生	蘇峯老台侍史	大演習取材準備、伊勢で軍艦乗船予定、46円落収
6	明治24年5月 日	紫山生	蘇峯老台	明日「忠奸弁」提出、掲載はお任せします
7	明治24年 月 日	紫山俠生	蘇峯老台	友人原稿天生女掲載依頼、新紙企画成る（経世新報）
8	明治24年 月 日	紫山俠生	蘇峯盟友	経世新報広告依頼、中西梅花の件は後から返答
9	明治24年 月 日	紫山生	蘇峯盟友	中西梅花を経世新報小説文学担当とするのは困難
10	明治26年12月 日	紫山	蘇峯先覚	拙稿を国民之友に掲載依頼、吉田松陰書評を希望
11	明治27年7月 日	紫山生	蘇峯詞兄	内閣開戦決意故に辞職勧告中止、国民之友停止意外
12	明治29年1月 日	紫山	蘇峯老兄	病欠見舞いに逗子養神亭を訪ねるも蘇峰帰京
13	明治37年12月 日	川崎紫山	徳富蘇峯盟台	信濃毎日新聞に赴任途上の一絶と就任報告（官製葉書）
14	明治38年8月29日	愚弟川崎	徳富老盟台玉几下	日露戦争諍論問題に付、切にご教訓を煩し度
15	明治 年 月 2日	北邨生	徳富老台侍史	古田喜三郎が持込んだ職掌夢談掲載を依頼 15-1, 15-2
16	明治 年 月 5日	紫山生	蘇峯老台	大隈への紹介を依頼、拙稿掲載依頼
17	明治 年 月 日	北村三郎	徳富猪一郎様玉榻下	野生友人岡本氏、老台に面会を希望
18	明治 年 月 日	小弟紫山	蘇峯先覚玉几下	横井小楠先生は陽明学者なりや
19	明治 年 月 日	紫山	蘇峯盟友	快文拝誦感謝、書外は拝芝の機会に譲る
20	明治 年 月 日	晩生北村生	徳富先覚几下	野生の書生を国民新聞配達人に採用を乞う
21	大正10年6月18日	川崎拝	蘇峯大人台下	水戸名産唐木細工、御笑納を乞う
22	大正13年2月20日	川崎三郎	徳富蘇峯様	久本氏を訪問、蘇峰の所存を伝達（絵葉書）
23	大正14年3月29日	川崎	蘇峯大人閣下	碑文の撰文、揮毫等依頼を御承知下さり、感謝
24	大正14年10月13日	川崎拝	蘇峯大人玉案下	御依頼の橋本景岳伝脱稿、先生の御揮毫希望
25	大正15年1月3日	川崎三郎	徳富猪一郎様	老龍菴訪蘇峯学人不遇、賦此寄懷
26	大正15年6月18日	川崎拝	蘇峯大人閣下	藤田東湖書翰中の大塩平八郎洋行説について
27	大正 年3月16日	川崎拝	蘇峯大人閣下	維新大綱目次、幕府制度の参考書
28	大正 年3月28日	川崎拝具	蘇峯先生玉案下	幕府制度取調の参考書、小中村義象博士著書が良し
29	大正 年12月15日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	長野県人塚田氏、所蔵の松陰の筆跡鑑定を乞う
30	昭和2年5月12日	川崎拝	蘇峯大人閣下	註訳大日本史料刊行企画、蘇峰に監修を乞う
31	昭和2年9月10日	川崎	蘇峯大人閣下	大日本史注釈企画進行、蘇峰に総監修を乞う
32	昭和3年2月9日	川崎拝	蘇峯先輩玉案下	内田良平主権東亜産業博、白石日記の件
33	昭和4年9月7日	川崎拝	蘇峯大人閣下	山県伝、四強戦争より皇政復興まで叙述
34	昭和(5)年1月25日	川崎拝	蘇峯大人玉榻下	蘇峰の漢文原稿修正、山県伝第二巻脱稿
35	昭和5年8月19日	紫山生拝	蘇峯徳富先生玉案下	山県伝取材で滞在中の塩原より漢詩を寄す（絵葉書）
36	昭和5年11月19日	川崎	蘇峯賢台	内田良平より送達の日韓合邦秘史の紹介依頼
37	昭和6年8月26日	川崎拝	蘇峯大人玉案下	山県伝大正政変に至る、熱海を引揚げ帰京予定
38	昭和7年11月18日	紫山未定	蘇峯大人閣下	東京日日所載論評を読み一絶を呈す
39	昭和8年6月27日	川崎拝	蘇峯大人閣下	山県伝の厚酬を感謝、松方伝は苦心推敲中

40	昭和8年8月22日	川崎拝	蘇峯大人閣下	託麻原碑文稿提出、松方伝は進行中御安神相成度
41	昭和9年7月17日	川崎拝	蘇峯老台玉案下	水郡鉄道功労者白石義郎碑の撰文依頼
42	昭和9年8月27日	川崎拝	蘇峯賢台玉案下	松方伝に付御教示願う、水郡鉄道碑文稿提出
43	昭和10年7月15日	川崎拝	蘇峯賢台玉案下	茨城助川城址記念碑執筆依頼、山梨谷村蘇峰会
44	昭和10年7月16日	川崎拝	蘇峯賢台玉案下	山県大式建碑式の祝辞依頼、文案は川崎代筆
45	昭和12年8月29日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	航空殉難者顕彰殿建設に御賛同を乞う
46	昭和(12)年9月18日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	吉田松陰東北漫遊地に建碑計画、揮毫を乞う
47	昭和(12)年9月22日	川崎拝	蘇峯賢大人玉案下	上記揮毫用紙到来、松陰先生游跡処が適当か
48	昭和13年1月1日	川崎拝	蘇峯先覚大人台啓	満州国・北支新政権視察の旅行予定
49	昭和(13)年2月6日	紫山	徳富蘇峯先生	冀東臨時政権視察、北京に向かう(絵葉書)
50	昭和13年9月5日	弟川崎	徳富老賢台玉案下	伊藤公遺筆の跋文未定稿提出
51	昭和13年9月13日	劣弟川崎拝	蘇峯大人閣下	題伊藤公書復の文字御惠贈感謝、国民史佳境期待
52	昭和14年11月8日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	京城への旅行企画、博文寺と朴泳孝氏遺族を訪う
53	昭和14年11月15日	川崎三郎	徳富蘇峯先生	平壤を訪れる、牡丹台は壯観を極む(絵葉書)
54	昭和15年6月19日	劣弟川崎拝	蘇峯先生玉案下	川上大将伝資料調査、池宗墨訳本に題詞を乞う
55	昭和15年8月8日	劣弟川崎拝	蘇峯先生玉案下	川上大将伝苦心執筆中、総論は先生大筆を願う
56	昭和15年8月15日	川崎三郎	蘇峯徳富先生玉案下	蘇峰大会の議決と先生の大演説に感服(絵葉書)
57	昭和15年11月13日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	川上大将伝11月末脱稿予定、大日本史訳注成稿
58	昭和15年11月22日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	古筠会組織者の韓永渉氏の接見を願う
59	昭和15年12月12日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	陸軍援助で明春『大東亜』創刊、御垂教を乞う
60	昭和16年1月5日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	先生の放送講演感激、雑誌初号に講演転載を乞う
61	昭和17年2月15日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	御出京の機会に大使館で徐大使との面会を乞う
62	昭和17年5月10日	川崎拝	蘇峯大人函丈玉案下	徐大使は御高教を希望、大使館への御来臨を乞う
63	昭和17年5月16日	川崎拝	蘇峯老台玉案下	南京政府外交部長接待で多忙、他日御来臨を乞う
64	昭和(17)年6月14日	川上拝	蘇峯老先生玉案下	褚民誼特使一行離京、再度大使館へ御来臨を乞う
65	昭和17年11月20日	川崎拝	蘇峯先生侍曹	先生の御快癒を祈る、野生病痼未癒転居療養中
66	昭和18年2月21日	川崎拝	蘇峯徳富先生玉案下	先生の御快癒を喜ぶ、深厚的御見舞に感謝
67	昭和18年3月29日	川崎拝	徳富蘇峯先生玉案下	並木氏の師門に復活を許され候ことに感謝
68	昭和 年3月16日	川崎拝	蘇峯大人閣下	東京日日福山が貴見へ面会希望、山県伝起草を急ぐ
69	昭和 年4月26日	川崎拝	蘇峯大人玉案下	尊稿に三卑見を付す、折角御自愛を乞う
70	昭和 年7月26日	川崎拝	蘇峯大人玉案下	近世勤皇家三十傑人選に迷う、御高見を乞う
71	昭和 年8月20日	川崎拝	蘇峯賢台玉案下	片野利三次氏の招きに依り別府・佐賀関を巡覧
72	昭和 年8月29日	川崎拝	蘇峯大人閣下	田尻堀里氏編纂贈位諸賢伝の国民新聞への紹介依頼
73	昭和 年 月21日	川崎拝	蘇峯先生玉案下	大月谷村より明日帰京予定、稿本再検討して明朝提出
74	昭和 年 月 日	川崎拝	蘇峯大人玉案下	貴囑三稿草案完成、上田英一郎碑文に御垂教乞う
75	昭和 年 月 日	川崎拝	蘇峯老賢台玉案下	昭和6年熊本陸軍大演習、昭和天皇八代宮参拝頌徳碑
76	年代不明	紫山劣弟	蘇峯老台	森永氏日本新聞記者列伝の資料募集のため面会希望
77	年代不明	紫山	蘇峯賢台	友人上田氏が面会希望(封筒に蘇峰筆で「川崎紫山」)

表 2 川崎三郎宛徳富蘇峰書翰

	年月日	差出人自称	宛名	書翰の要旨
1	明治23年 3 月14日	徳富生	紫山大兄	人物選定について提案（3月11日川崎書簡への返信）
2	明治(23)年 4 月 3 日	徳富猪	紫山老兄玉案下	第1回陸海軍大演習の後、京都疎水開業式取材を依頼
3	明治(24)年 5 月19日	猪一郎	紫山老兄貴下	国民新聞停止につき国民之友への原稿を依頼
4	明治44年10月 4 日	猪	紫山老兄大人	老父談話困難につき面会お見合せを願う
5	大正 3 年 5 月 7 日	猪	紫山大人	一橋慶喜に仕えた原仲享に関する史料の教示を乞う
6	大正 8 年 5 月 2 日	猪	紫山大人玉几下	江州塚本源三郎氏母堂開設の高女開業式辞代作を依頼
7	大正10年 2 月22日	猪	紫山先生	漢詩代作依頼
8	昭和 6 年 5 月29日	猪	川崎紫山大人	天皇行幸記念碑並びに茶業日本第一碑の撰文依頼
9	昭和 6 年 8 月28日	徳富猪一郎	川崎三郎様	公爵山県有朋の序文案か
10	昭和 9 年 7 月18日	猪	紫山先生玉几下	御申聞一件、先生御起稿願う、賤名の使用は一任す
11	昭和10年 1 月19日	蘇叟	紫山大人	潤筆料送付
12	昭和10年 7 月16日	蘇叟	紫山先生玉几下	御手教敬承、御来光延頸御待申上候
13	昭和10年 7 月17日	徳富猪一郎	川崎紫山大人	御来示敬承、万事貴意の通り悦申上候也（葉書）
14	年代不明	徳富猪一郎	川崎大人	戊辰戦争原稿執筆の凡例？
15	年代不明	老人	紫山先生玉几下	過日尊著拝受、勝海舟碑文と長野氏碑文の御叱正を乞う

の手紙がスッポリと抜けているという事実は揺るがない。この手紙の空白期間に川崎と徳富に交流があったことは表2から明かであるし、表3川崎三郎略年譜案を見ると、大正の前半には、蘇峰企画の「明治天皇御宇史」編纂事業（中断）や『公爵桂太郎』編纂で川崎と徳富は密接な関係を持っていたことが明らかなので、両者の間に手紙の遣り取りがあつて当然である。この一五年間の手紙は、途中で紛失したのか、あるいはまとまつて別の徳富蘇峰関係資料館に収蔵されているかもしれない。

次に書翰の自称と宛名の敬称および脇付の書き方の時期的変化から、両者の関係性の変化を検討したい。

表1の徳富宛川崎書翰の場合、川崎1から川崎20までの明治期の書翰と、川崎21から川崎75までの大正・昭和期の書翰とでは、自称・敬称とも大きく変化している。

自称については、川崎は徴兵検査を明治一六（一八八三）年に受ける予定であったが、その直前の一八八一年か一八八二年に徴兵検査を逃れるため、記者として働いていた東京曙新聞の社長兼編集長岡本武雄の親戚北村家を継いで北村三郎と名乗りはじめ、その一〇年後の明治二四（一八九一）年末から復姓し

表 3 川崎三郎略年譜案

1863	(徳富猪一郎、熊本水俣の郷士の家に誕生)
1864	水戸藩士川崎胤興 3 男、名は胤賛、号は紫山。自強館で学び1880年頃上京、大蔵省勤務か。
1881	東京曙新聞記者、翌1882年大阪で発行された立憲帝政党機関紙『大東日報』記者。徴兵逃れのため曙新聞社長兼編集長岡本武雄の親戚北村家を継ぎ北村三郎と名乗る。
1886	(徳富『将来之日本』出版、ベストセラー)
1887	処女作、政治小説『新帝国策』刊行。(徳富、『国民之友』創刊)
1888	東洋経論『東洋策』刊行。
1889	博文館の企画に参加。『万国歴史全書』1889～90年、『世界百傑伝』1890～91年、『日本百傑伝』後半1893年、『西南戦史』1893年、『戊辰戦史』1893～94年など。
1890	東邦協会の設立趣意書起草。雑誌『活世界』創刊。(徳富、『国民新聞』創刊)
1891	『経世新報』創刊 (9.9)、この頃、北村姓から川崎姓に戻す。翌1892年、雲台の機微事件で休刊、再刊するも 9 月廃刊。
1894	『中央新聞』記者として対外硬派「新聞同盟」に参加。『朝鮮革新策』を 7 月末刊行。第一軍従軍、山県有朋・桂太郎と平壤へ。「赤痢病」に罹り、95年までソウルに滞在。
1895	博文館が総合雑誌『太陽』発行、川崎は1895～1900年頃まで常連寄稿者。
1896	『日清戦史』刊行開始 (1897年完成)。
1897	松方正義の援助で中国視察へ、『太陽』に中国滞在記掲載。
1899	国民協会後身の帝国党の設立に参加。
1901	中央新聞主筆。黒龍会に参加。
1904	『信濃毎日新聞』主筆 (1906年まで)。朝鮮一進会に関係、日韓合邦運動に参加。
1908～11	『西南紀伝』執筆・刊行 (黒龍会本部、内田良平名義)。
1914	蘇峰企画の「明治天皇御宇史」の助手 (年間500円)。次いで、徳富蘇峰編『公爵桂太郎伝』の中心的な執筆スタッフとなる。1916年原稿完成、1917年刊行。
1920年代後半	大津淳一郎の依頼で『大日本憲政史』全 7 巻を編纂。
1920年代後半～1930年代前半	徳富蘇峰の依頼で、山県有朋と松方正義の伝記を執筆。
1939～41	『訳注大日本史』刊行。
1940	『陸軍大将川上操六』(徳富蘇峰編、薩藩史研究会刊行、1942年)執筆。
1941	陸軍の援助で雑誌『大東亜』発刊。
1943	5 月12日没、享年80歳。

出典：『国史大辞典』・『明治時代史大辞典』（共に吉川弘文館刊）の「川崎三郎（紫山）」の項と拙論「忘れられたジャーナリスト・史論家・アジア主義者川崎三郎」（『専修史学』29号、1998）・同「川崎三郎小論」（『近世近代の地域と権力』清文堂、1998）より作成。

て再び川崎三郎と名乗った（表3参照）。したがって、明治期書翰の自称には「北邨生」あるいは雅号の「紫山」・「紫山生」が多く、一部に「小弟北邨生」や「愚弟川崎」とやや遜っている場合もある。

敬称は、「先輩」、「先生」、「先覚」、「老台」、「老兄」、「詞兄」、「盟友」、「盟台」などがあるが、「先生」を除けば、いずれの敬称もほぼ対等な人間関係で使用される用語である。三分の一程の手紙には脇付があり、「侍史」、「玉机下」、「玉榻下」のような丁寧な脇付の用例がある。

結論的には、明治期の徳富宛川崎書翰は、自称、敬称、脇付から見て、川崎は自分と徳富は対等な関係であると考えていたようである。例外は川崎14（明治三八年八月二九日）で、ポーツマス条約締結直前の徳富に対して講和問題に関して教示を乞う手紙は、自称「愚弟川崎」で、宛名は「徳富老盟台玉几下」とかなり丁寧である。日露戦争の頃から川崎と徳富の関係が変わり始めるのかもしれない。なお、年代不明の川崎76と川崎77は、自称・宛名敬称から見て、明治期の書翰と推定できる。

日露戦争後、川崎は日韓合邦運動に関与するとともに、政治運動と並行して黒龍会本部から刊行された分厚い『西南紀伝』全六冊を執筆して、挫折した西郷隆盛による「進取」の政策を高く評価することによって、間接的に第二次桂太郎内閣の韓国併合政策を批判した。一九一二（明治四五）年に明治が終わり、大正が始まると、五〇歳になった川崎はジャーナリストとしての活動を限定し、また自分の名前で歴史書を執筆することも止めて、職業的な歴史ライターとして徳富蘇峰や大津淳一郎に雇われて原稿料を得るようになった。この生活スタイルは大正初期から一九三〇年代半ばまで、二〇年以上続いた。

空白の一五年間のあとの、大正後期・昭和期二二年間の徳富宛川崎書翰は五五通と数が多く、自称、敬称、脇付は明治期と一変する。

自称は、「川崎拝」、「川崎三郎」と本名を記すものが圧倒的で、稀に「紫山生」、「弟紫山」、「劣弟川崎拝」と雅号を使用するものがある。他方の徳富に対する敬称は「大人」、「先生」がほとんどで、同格の人物に用いる「先輩」、「賢台」、「老賢台」などの事例は数少ない。脇付は、葉書を除くほとんど全ての手紙で使用され、「閣下」、「侍曹」、「台下」、「函丈」、「玉案下」、「玉榻下」など、目上、師、高貴な人に対して用いる用語が使われた。その結果、徳富に対する宛名は、「蘇峯大人台下」、「蘇峯大人閣下」、「蘇峯賢台大人玉案下」、「蘇峯先覚大人台啓」、「蘇峯大人函丈玉案下」などと、大げさなものとなった。自称を雅号ではなく本名で書き、宛名を最大限の尊敬を込めて書くことで、川崎はスポンサーである徳富に最大限の敬意を払ったのである。

一方、表2の川崎宛徳富書翰は違った様相を示す。蘇峯の書いた手紙では、自称は本名の「徳富生」か「徳富猪一郎」、または名前の「猪一郎」・「猪」が使用され、例外的に「蘇叟」が二通ある。宛名は雅号の「紫山」の使用が多く、例外的に「川崎三郎」の本名を記したものがある。敬称は、明治二〇年代は対等な関係を意味する「大兄」、「老兄」の使用があるが、それ以後は「大人」と「先生」である。脇付は、「貴下」、「玉案下」、「玉几下」が約半数の手紙に使用されている。これらのことから蘇峯は川崎を、明治二〇年代には対等な関係のジャーナリスト・著述家として扱い、大正から昭和にかけては自身の歴史編纂事業の不可欠の協力者として敬意を以て接したことが伺える。徳富と川崎の関係が長続きした原因として、両者が相互補完的な関係にあったことと、手紙の書き方に見られるように両者が大人の対応を維持し、相互に敬意を持って付き合ったことが挙げられる。

(三) 明治期の往復書翰

川崎が徳富を訪ねたのは、榎木坂湯浅邸にあった民友社事務所を訪ねたのが最初であり、「『国民之友』が発刊さ

れるや、豊公征韓役など多くの史論や政論を「蘆中之人」の変名で寄稿した⁽⁵⁾と、徳富伝を著した早川喜代次は記す。徳富は一八八六（明治一九）年末、一家を挙げて上京し、翌一八八七（明治二〇）年二月一五日に『国民之友』を創刊したから、早川の記述に拠れば、『国民之友』創刊の前後に川崎と徳富は知り合ったことになる。さらに徳富が一八九〇（明治二三）年に『国民新聞』を創刊すると、川崎は「蘆中の人」や「紫山浪人」他の複数のペンネームを使って記事を寄せており、その数は少なくない。

徳富と最初に出会った頃、川崎は東京と大阪での新聞記者経験を経て帰京し、一八八七年五月発行の処女作『新帝国策』を執筆中で、つづいて翌年一八八八年には東洋経綸策を述べた『東洋策』を出版した。さらに翌年一八八九（明治二二）年からは博文館の企画に参加し、以後一〇年余り博文館を執筆活動の拠点とした。そして一歳年長の徳富の後を追うように、一八九〇年に雑誌『活世界』の創刊に参加し、一八九一（明治二四）年に松方正義や渡辺国武の援助で『経世新報』にこぎ着けた（表3参照）。

川崎1から川崎9までの九通は一八九〇年と一八九一年のもので、川崎と徳富が若きジャーナリスト、著述家として活躍し始めた頃の手紙である。また明治時代の年月日が確定できない川崎15から川崎20の六通も、同時期のものである可能性が強い。これに対応するのが、徳富1から徳富3までの三通である。

川崎1は、単独で『世界百傑伝』一二冊（一八九〇年三月～一八九一年四月）に挑戦し始めた川崎が、徳富に百傑伝に掲載する人物の選定を相談し、同時に第一編巻頭に徳富の題辞を依頼する内容である。結局、第一編には、勝海舟、渡辺国武、徳富蘇峰、栗本鋤雲が題辞を寄せた。

川崎2と川崎3および徳富1の三通は、川崎が「蘆中の人」のペンネームで一八九〇年五月から『国民新聞』に連載を始めた、現代の著名人論の「也夢」シリーズの人選の相談である。

川崎4と川崎5および徳富2の三通は、一八九〇年三月三〇日から四月三日の五日間、西三河から尾張東部にかけての地域で行われた第一回陸海軍大演習の取材に関する打ち合わせの手紙である。川崎は徳富の依頼を受けて愛知県で大演習の取材を行い、これが終わると、四月九日に明治天皇と皇后が臨席して行われた、琵琶湖疏水竣工式の取材にも赴いた。この取材は『国民新聞』紙上の「閃電光」と題する二七回連載の記事となった。

一八九一年五月、『国民新聞』が発行停止処分を受けると、徳富は川崎に『国民之友』に掲載する原稿を依頼（徳富3）、川崎はこれに応え「忠奸弁」と題す原稿を寄せた（川崎6）。結局この記事は六月初旬に『国民新聞』に掲載された。そして、同じ一八九一年の川崎7・川崎8・川崎9は、同年九月に発刊され、実質的に川崎が編集長となった『経世新報』に関連する手紙で、そこには新聞経営に乗り出そうとする川崎の若者らしい気負いが見える。

以上の一八九〇年と一八九一年の往復書翰からは、川崎が徳富の経営する『国民之友』と『国民新聞』の重要な寄稿者の一人であったこと、そして川崎は博文館での歴史書叙述と『国民之友』・『国民新聞』での活動を足がかりに、自ら新聞経営に乗り出していた様子が分かる。徳富は自伝で、当時の自分の思想を「平民的急進主義」（教科書的には平民的欧化主義）と定義しており、一方の川崎は武断的・侵略的なアジア主義者であった。二人の思想、つまり平民的欧化主義と侵略的アジア主義が『国民新聞』紙上で共存できた理由については、かつて拙稿で議論した。^⑥

これらに続く川崎10・川崎11・川崎12は、日清戦争前後の両者の関係を示す。徳富は『吉田松陰』を書き、さらに三国干渉を経験することで、平民的欧化主義から国家主義・対外膨張論に変化するが、そうなると川崎と徳富の思想的差違は僅かなものになった。^⑦

日露戦争期の両者の関係を示すのが、川崎13、川崎14である。徳富の推薦で、川崎は山路愛山の後を襲って一九

○四年末に『信濃毎日新聞』主筆となり、一九〇六年まで在籍した。すでに述べたように、この頃になると、川崎は徳富を尊重し、依存する傾向が始まったことが、川崎の手紙から伺える。

（四）大正・昭和期の往復書翰

明治末期に日韓合邦運動と『西南紀伝』執筆で忙しかった川崎と、徳富との関係が再び深まったのは一九一四（大正三）年のことであった。一九一三年、桂新党を支持した徳富の国民新聞社は二度目の焼き討ちを受け、一〇月一日、桂が死ぬと、桂の御用記者であった徳富は政界から離れ、再び新聞事業に専念した。翌年、徳富は明治天皇御宇史を企画し、川崎はその助手となったが、同年の第一次世界大戦への参戦と父徳富一敬の死去のため計画は頓挫した。その後、桂太郎伝の編纂が始まると、川崎は伝記執筆と原稿全体の整理統一を担当し、『公爵桂太郎伝』は一九一七年二月に出版された。満を持して徳富は翌年一九一八（大正七）年六月、『近世日本国民史』を起稿した。徳富5および徳富14と川崎27および川崎28が上記の出来事と関連している可能性がある。徳富5では、徳富は一橋慶喜の側近原仲寧の文集を読んだ上で、さらに川崎に原に関する史料がないかと問い合わせた。すでに述べたように川崎に『戊辰戦史』一二冊の著書があったからであろう。川崎27、川崎28は徳富の依頼を承けて、川崎が幕府制度を調べた報告である。年代不詳の徳富14は住所が青山なので一九二二（大正一一）年以前の手紙であるが、鳥羽伏見、上野彰義隊、会津戦争、函館戦争、つまり戊辰戦争について、徳富は執筆要項を示して原稿を書くように指示している。この原稿が、明治天皇御宇史なのか、桂伝なのか、また『近世日本国民史』に関連するものなのかは判然としない。

桂伝の後も川崎は徳富に協力を続け、川崎24（一九二五年）では依頼された橋本景岳伝ができたことを伝え、川

崎25では大塩平八郎洋行説について質問に答えている。昭和に入ると、川崎は『公爵山県有朋伝』（一九三三（昭和八）年）と『公爵松方正義伝』（一九三五（昭和一〇）年）の執筆依頼を受けた。川崎33、川崎34、川崎35、川崎37では山県伝の進行状況を報告している。徳富9は、徳富が川崎に『公爵山県有朋伝』上巻の第一編「青年時代」第一章「総叙」―「政治的獨特の位置」の原案を送る手紙である。川崎39、川崎40、川崎42は松方伝に関するもので、川崎39では山県伝の執筆料の厚報を感謝するとともに、松方の生涯は変化に乏しく苦心推敲中と述べ、川崎42では宮中某重大事件や第二次護憲運動と松方の関係について徳富の教示を求めている。この後しばらく伝記編纂はなかったが、最後に、薩藩史研究会の依頼を徳富が受けた『陸軍大将川上操六』（一九四二年一月）の執筆が川崎に回ってきた。川崎はすでに七〇歳代後半になっていたにもかかわらず、これを一年余りで書き上げた。川崎54、川崎55、川崎57が川上伝関係である。

以上のような、徳富の修史事業に協力し、また徳富が企画あるいは依頼された伝記編纂事業に参加し、執筆を引き受けるだけでなく、川崎は多忙な蘇峰の仕事の一部を支えた。例えば、徳富6では川崎に滋賀県の篤志家が創立した高等女学校開業式式辞の代作を、徳富7では漢詩の代作を依頼しているし、徳富8は建立予定の天皇行幸記念碑文案などについて相談している。また、川崎75は徳富の依頼に応えて、川崎が熊本県八代城跡に建立する行幸記念碑の文案を考えたものであろう。大正から昭和期になると、徳富に式辞、碑文、揮毫、漢詩などを求めるものが増えたが、川崎は多忙な蘇峰に依頼されこれらの案文起草に忙しかった。また川崎自身も、故郷の知友に徳富の揮毫、碑文を頼まれていたようであるが、そんな場合、川崎の方で案文を作って蘇峰に書いてもらったようである。

このような徳富と川崎の関係であったが、両者の共通の趣味であった漢詩が精神的に両者を結びつけていた可能性がある。徳富10の追伸部分で、徳富は川崎を夏の別荘である山中湖双宜荘に招くとともに、新聞に掲載した漢詩

の批評を依頼している。一方の川崎も徳富に漢詩を送り（川崎25、川崎35、川崎38）、時には蘇峰に漢詩漢文の添削を依頼されている（川崎34）。

松方伝の原稿が完成して時間的な余裕ができると、川崎は執筆と政治運動を再開した。執筆活動の中心は『訳注大日本史』（全12巻、建国記念事業会編、一九三九年五月―一九四一年一〇月）である。すでに一九二七（昭和二年）の手紙で川崎は徳富に『訳注大日本史』の企画を告げ、監修に名を連ねることを依頼していた（川崎30、川崎31）。山県伝と松方伝のため多忙であったこともあり計画は遅れていたが、一九四〇年末には原稿ができあがった（川崎57）。この後、川崎は念願の『金玉均伝』下巻（甲申政変後の日本亡命時代）の執筆に着手することを希望していたが、彼の死によって実現できず、徳富蘇峰の推薦で執筆にあたった前田蓮山の草稿も敗戦のため出版に至らなかった。⁽⁸⁾

政治面では、一九三八年、川崎は満州国と北京に視察に出かけた（川崎48、川崎49）。この時、冀東防共自治政府幹部池宗墨と知り合い、彼の著書を日本語訳して出版している。⁽⁹⁾ また南京政権とも関係ができ、南京政権幹部褚民誼外交部長が一九四二年訪日した際には、徳富との会談を画策している（川崎61から川崎64）。これより先、一九四〇年には、陸軍の援助で大東亜協会を設立し、一九四一年から機関誌『大東亜』を刊行するとともに、大東亜文庫シリーズの出版活動に没頭した。

一九四二年秋頃から体調を崩した川崎は、翌一九四三年五月一二日、八〇歳で死亡した。徳富と静子夫人へ宛てた、一九四三年三月二九日付の手紙（川崎67）が徳富蘇峰記念館の所蔵する最後の手紙である。文字も弱々しいが、川崎は徳富に対して、治療代の負担をかけたこと、古筠会（金玉均記念会）に同情を示してくれたことなどに感謝しつつ、最後に雑誌『大東亜』に毎日新聞紙上に掲載された徳富の「アングロサクソ解剖ノ大論文」の転載を懇願

している。川崎のジャーナリスト魂は最後まで健在だったのである。

(五) むすびにかえて

以上の解説によつて、川崎三郎（紫山）と徳富蘇峰が友人として、そして仕事仲間として、五〇年以上に亘つて関係を持ってきたことを明らかにした。筆者は川崎三郎という、現代では忘れ去られてしまったアジア主義者のジャーナリスト・歴史家の生涯を復元してみたいという夢を持っている。本稿は不十分であることは自覚しているが、その研究の基礎となるものである。

しかし、今回の解説でも部分的に触れているが、川崎の生涯と仕事について研究する時、徳富蘇峰との関係は最も重要な柱であることは間違いないものの、それだけでは不十分であり、他の人物との関係を追求する必要があるので、最後にその点に言及して拙い解説を終わりたい。

彼の活動の柱は朝鮮問題であり、その切掛けとなったのは、甲申政変に失敗して日本に亡命した朴泳孝と金玉均との出会いである。¹⁰ 徳富宛川崎三郎の最後の手紙（川崎67）でも、金玉均のことは頭から離れなかった。そして、この分野に関係する内田良平、黒龍会との関係についても今後研究を深める必要がある。

最近、牧民雄『日本で初めて労働組合をつくった男―評伝・城常太郎』（同時代社、二〇一五年）という本を読む機会があり、サンフランシスコで組織された労働義友会を紹介する記事が、川崎の新聞『経世新報』一八九一年一〇月一六日号に掲載されたこと、そして翌年一八九二年に大井憲太郎等が結成した東洋自由党の機関誌『新東洋』創刊号に川崎の祝辞が掲載されていることを知った。貧民労働者保護、内地雑居問題などを介して、『経世新報』が初期労働問題と関係を持つという視点は、筆者にとって新しい視点であつた。放置してきた『経世新報』分析に早

急に取らなければならないと覚悟した次第である。

注

- (1) 財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団編『徳富蘇峰宛書簡目録』（徳富蘇峰記念館、一九九五年）の「目録出版にあたって」（伊藤隆、『編集後記』（徳富蘇峰記念館学芸員高野静子）および『デジタル版日本人名大辞典+Plus』の塩崎彦市の項を参照）。
- (2) 伊藤隆、坂田正敏、坂野潤治他編『徳富蘇峰関係文書』全三冊（近代日本史料選書711・713、山川出版社、一九八二年、一九八五年、一九八七年）。高野静子『蘇峰とその時代』（中央公論社、一九八八年）、同『蘇峰とその時代・続』（徳富蘇峰記念館、一九九八年）、同『往復書翰・後藤新平―徳富蘇峰 一八九五―一九二九』（藤原書店、二〇〇五年）、同『蘇峰への手紙―中江兆民から松岡洋右まで』（藤原書店、二〇一〇年）など。
- (3) 早川喜代次『徳富蘇峰』（徳富蘇峰伝記編集会、一九六八年）の「あとがき」によれば、徳富蘇峰伝記編集会は一九四〇年結成され、早川は「東京を中心として九州・京都などを馳せまわり、多数の蘇峰翁の知友に会い、興味ある資料を入手し、これに基づいて、その都度翁に面談して一々これを確認致し」、「ある時は山王草堂の書庫に一人入って資料を探」す、などして伝記の執筆を進め、完成した伝記は一九四五年夏に富山房から刊行予定だったが敗戦により中止され、そして蘇峰の死後、一九六八年に刊行された。早川は福島会津出身で、会津中学卒業後は下野日々、福島民報、報知新聞の記者を歴任し、一九二七年高等試験司法科に合格して東京で弁護士を開業した。また、一九三八年、野口英世記念館創立委員・理事となり、一九四五年故郷会津に帰り、一九五六年、白虎隊記念館を創立し、同館の館長兼理事長を務めている。この注記の典拠は、早川『徳富蘇峰』および徳富蘇峰記念館ホームページの人物検索等に拠る。
- (4) 現在筆者が把握している川崎の著作は、単著とシリーズもの（シリーズものは何冊あっても一点と数える）を合わせて五一点である。一八八〇年代後半の三年間に七点、一八九〇年代に三二点（この中には『世界百傑伝』一二冊、『日本百傑伝』七冊、『戊辰戦史』一二冊、『西南戦史』一二冊、『日清戦史』七冊が含まれる）、一九〇〇年代に五点、一九一〇年代と一九二〇年代には川崎単独の著作はなく、一九三〇年代に四点、一九四〇年代に三点となる。この数字から、川崎の著作活動が一八八〇年代後半から一九〇〇年代前半の二〇年足らずの期間に集中し、この間に四三点ものの著作を執筆したことが分かる。過半は歴史書、史論であるが、その凄まじい筆力には驚くほかはない。これと対照的に、職業的歴史ライターとして過ごした一九二〇年代と一九二

○年代には著書は皆無である。そして、山県有朋伝と松方正義伝が終了した一九三〇年代後半から一九四〇年代初めにかけて、ロウソクが燃え尽きる寸前に最後の輝きを放つように、『訳注大日本史』全一二冊の偉業と数冊の本を上梓して、川崎はこの世を去った。

(5) 前掲早川『徳富蘇峰』四三一頁。

(6) 拙稿「忘れられたジャーナリスト―日清戦争以前」(『専修史学』二九号、一九九八年) 参照。

(7) ビン・シン『評伝徳富蘇峰』(杉原志啓訳、岩波書店、一九九四年) 四四頁から四五頁。

(8) 古筠記念会編『金玉均伝』上巻(慶応出版、一九四四年)の「凡例」参照。

(9) 池宗墨著・日本紫山川崎三郎校『王道経綸論集』(大東亜協会、一九四一年五月)。

(10) 茂木克美「『須永文庫』の甲申政変関係資料」(『東アジア近代史』二三号、二〇一九年六月)。この資料紹介論文は筆者に新しい視点を気づかせてくれた、まさに学恩を被った論文である。

二〇二〇年三月を以て、文学部歴史学科の近江吉明教授が定年退職される。二五年に亘る友情を思い起こし、拙稿を近江さんに献呈します。

また末筆ですが、徳富蘇峰書翰・川崎三郎書翰の翻刻を許可して下さいました徳富蘇峰記念館に感謝致します。